

第9回 WHO グローバルネットワーク学術集会参加印象記

奈良県立医科大学医学部看護学科

藤田 比左子

Impression of the 9th International Conference with the Global Network of WHO

Hisako FUJITA

Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University

1. International Conference with the Global Network of WHO について

第9回 WHO グローバルネットワーク学術集会 (The 9th International Conference with the Global Network of WHO) は、2012年6月30日から7月1日まで、神戸にて開催された。

会場となった神戸ポートピアホテルは、三宮駅から出ているポートライナー「市民広場」駅下車すぐに位置しているという利便性に加え、国際会議場ポートピアホール (平成9年3月オープン) を備えており、多くの国際会議や集会が開催されていることは周知のとおりである。余談であるが、日本政府観光局の国際会議統計によると、ホテルでの国際会議の開催件数は、京王プラザホテルが常に第1位であったが、2010年には京王プラザホテル20件を引き離し、神戸ポートピアホテルが31件で第1位となった。2011年では、京王プラザホテル22件、神戸ポートピアホテル14件と再び第2位となった。奈良県新公会堂も、「会場別 国際会議の開催件数」に掲載されており、2010年は19件、2011年は11件と健闘している。我が国全体として、2011年の国際会議の開催は、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の影響により、前年比12.4%減(267件減)であったとされることから、今後の回復が期待される。

WHOのグローバルネットワーク会議は、2年に1度の開催であるが、9回目となる今回は、初の日本での会議となった。この開催に伴い、日本看護系大学協議会兵庫県立大学・聖路加看護大学が中心となって、今回の学会

(学術集会長：兵庫県立大学地域ケア開発研究所所長 山本あい子氏) が開催された。

今年度の学術集会は、東日本大震災を受け、「基本的な医療ケアでさえ、不測の事態に備える」(Even with basic health care, prepare for the unexpected) に焦点が当てられたものだった。6月30日の9時30分からのオープニングセレモニーに始まり、国内外の研究者によるキーノート・スピーチ4演題、リレープレゼンテーション9演題、250演題余りのポスター発表があり、わずか2日間とは思えないほど興味深い講演や発表が続いた。

2. 看護教育に関する研究発表

初日のキーノート・スピーチでは、カリフォルニア大学のパトリシア・ベナー氏が講演 (Transforming Nursing Education: Implications of the Carnegie National Nursing Education Study) をされた。興味深かった点は、専門職を志す学生たちが、なぜ知識を得たとしても、なぜ、すぐに実践することが困難なのか、ということであり、PPP(Preparation for the Profession Program : URL

<http://www.carnegiefoundation.org/previous-work/professional-graduate-education>) について紹介された。これは、知識・技術・態度の視点からの取り組みで、工学・法学・医学・看護学における専門職教育を比較したものだという。初学者である学生たちは、

- 1) 知識：専門職に関連する理論を科学的に学ぶ。
- 2) 技術：臨床的な根拠を学び、具体的な方

法で実践し、かつそれらをどんな臨床の場で活用するか、を習得する。

3) 態度：倫理的な要素を形成する。
 という3側面を学ぶ必要があるという。知識を獲得した確認の1つは、講義後によく用いられる選択式試験（ミニテスト）であるが、学生が良い点を取ったとしても、それは、技術の点で、根拠や方法・知識の活用にはならないため、臨床的実践に結びくのが困難であるという。

それらに対する教育方法とし、現在、educatingnursesvideos.com として紹介されているような臨床場面での単純なものから複雑なものまでの状況設定をしたケース・スタディをビデオにより提供しているとのことであった。これについては、Educating Nurses Video Preview として、インターネット上でのYouTubeでも紹介されているため、関心のある方は参照していただきたい。

(URL:

<http://www.youtube.com/user/EducatingNursesVideo/videos>

<http://www.youtube.com/watch?v=La9vWaeqNxM>)

このビデオを使った学習では、答えを求める教育方法ではなく、「なぜ?」「どうして?」と根拠を問い、学生間でのディスカッションにより、他者の考えを聞く機会を多く設けることが重要とのことであった。また、ケース・スタディにより、臨床場面をイメージできるように発展させることや、臨床教育システムを確立させていくことも必要である、という講演内容であった。

今回のパトリシア・ベナー氏の講演内容は、筆者らが現在行っている教育方法の確認と改善点について、大きな示唆となった。特に、基礎看護学領域では、担当科目のほとんどの対象が第1~2学年であるため、臨床場面がイメージできないまま、看護技術系の演習を行っていることが大きな課題である。そのため、演習の中で、なるべく臨床場面を設定した単純~複合課題までをケース・スタディと

して示したり、紙面やデモンストレーションなどで体験できるようにしている。また、知識との統合ができるよう、紙面上でのアセスメントを展開することも重視している。ベナー氏が示すような映像での提供は、マンパワーやコストの点から、なかなか実現は困難ではあるが、今後も、設定する臨床場面を充実させ、学生の知識の活用に対する教育を発展させていきたいと考える。

3. 学生の国際学会初参加

今回の学会参加のもう一つの目的は、学生の研究的視野を修得する機会としての提供である。学生の多くは、学会の一つにも触れることなく、看護研究論文を作成していると思われ、さぞかし不安であろうことは想像するに難くない。学会という研究者が集まり、熱い議論が交わされる場に、学生がその身を置き、雰囲気を感じ、研究の風に曝されることは、研究のセンスが芽吹く最短の道と筆者は考えている。看護学実習や医学実習においても、Early Exposure (早期体験実習) が非常に重要であると言われ、文部科学省から示されたカリキュラムの改善(文部省、1996)や、各大学が医療系学部に限らず、専門職教育として積極的に取り組んでいる。このことは、研究についてもいえることなのではないだろうか。

筆者は、かねてより、学生の学会参加(国際学会ならなおよい)を促す機会を常に考えてきた。今回は、国内での国際学会という大きな機会に恵まれ、4名の学部生の参加を実現できたため、その成果をまとめたいと思う。

学会参加、特に国際学会の場合、学生の参加を阻む最大の要因は、参加費であろう。今回の参加費は、一般が4万円、学生は学割設定により、国際学会への参加費としては、格安ともいえる2万円であった。とはいうものの、学生たちは、学会に参加するだけで、2万円も必要とは思ってもみなかったようで、「是非参加してみたいです」と言う一方で、「そんなにするんですか」と驚いていた。し

かし、どうしても参加したい、本でしか見たことがないベナー「先生」のお話を聴ける、という期待感のような言葉とともに、すんなり参加を決心したようだった。これには筆者も、学生たちの向学心というのは、一時の経済的事情を優に超えられてしまうものだということを実感した。

学会初日は、学生たちは学会への参加自体が初めてなので、受付での参加登録の仕方からわからないということで、会場前で待ち合わせをした。参加費の支払い、抄録集などの入ったバッグの受け取り、ネームタグへの記名などをスムーズに行った。受付では翻訳レシーバーの使用を尋ねられ、迷わず全員が受け取ったものの扱いがわからず、筆者の説明にとっても感心していた。オープニング・セレモニーでは、スクール形式の椅子の扱い方など1つ1つに感激し、会長講演にも熱心に耳を傾けていた。翻訳レシーバーで同時通訳を生で聴くのも初めてであり、タイムラグが少しあることに戸惑いをみせていた。

なかでも、ベナー氏の講演には、熱心に学生たちは耳を傾け、とても感激した様子であった。理論家は、自分たちとは無縁のものであり、本の中だけの人だと思っていたが、ベナー氏が非常にわかりやすくお話しされたこともあり、知識の獲得から活用して実践するまでには時間がかかる、という説明に、そうそう、すごくよくわかる、と同感していた。また、理論が実践に本当に役に立つのだということがよくわかった、机上の学習だけでなく、ちゃんと実習室でもっと練習が必要だった、と反省の弁も入れながら、声を弾ませていた。

2日目は、会場への出入りにも、学生たちは慣れた様子を見せた。ポスター・セッションでは、各ポスターの前で簡単なプレゼンテーションが行われ、質疑応答が行われる、というラウンド形式となっていた。学生たちの頼みの翻訳レシーバーは使えないが、一生懸命に耳を傾け、ラウンド後の時間では、興味のあるポスターの前にたたずみ、電子辞書を

片手に、必死で内容を読み取ろうとする姿が見られた(写真1)。



写真1. ポスターの前の学生たち

そのうちに、質問もわいてきたようだが、障壁となったのは、やはり英語であった。筆者も英語が得意な方ではないが、発表者への質問をするなどして、コミュニケーションがとれるよう配慮した。午後からは、気付けば学生たちは、物怖じすることなく、各自の関心で、自由に動くようになっていた。自分の看護研究のテーマに近いものを探すなど1つのポスターを見つめる姿(写真2)や、発表者につたない英語で話す姿もみられる(写真3)ようになっていた。



写真2. ポスターに見入る学生

午前中は感心するばかりであったが、午後は、ポスターの構成や内容にふれ、英語がよくわからないと言いながらも、統計学的な分析の意味や、ポスターの読みやすさ、結果の提示、考察の視点などについて、筆者に質問してくるようになった。いずれ自分たちも、看護研究の発表会でポスターを作成する際に

おさえておかなければならない点を心得え、大変熱心にセッションに参加した。ここでも、筆者は、学問的な刺激が、こんなにも短時間で学生を変化させてしまうものなのかと驚愕し、教員たちを越える日は、そう遠くないと感じた。

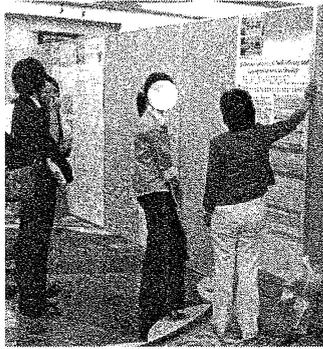


写真3. ポスター前で熱心に話を聴く学生

学会の最後のクロージング・セッションまで参加し、学生たちの国際学会デビューが終了した(写真4)。その後、参加費について、筆者が確認したところ、2万円以上の価値があり、今となっては高いとは思えない、行って本当に良かった、と興奮さめやらぬ様子であった。



写真4. 会場入り口前にて

そして、12月末に、学生たちは、看護研究の科目として、学内発表会をむかえた。本学看護学科でのポスターによる発表会が行われる。この国際学会に参加した学生たちは、あの国際学会でもそうでした、というように、具体的なイメージがあるためか、ポスター作成から修正までを、非常にスムーズに行っ

た。最初は原稿の棒読みだったプレゼンテーションも、国際学会での体験をもとに、予演会では、発表時間の厳守や、わかりやすさを意識したプレゼンテーションができるようになっていた。また、時間の超過、同じ言葉の重複、学生個々の言い回しといった癖などの修正点も明確となった。

発表会前日のポスターを貼る準備では、準備開始前までに、ポスターを1枚にしていたため、あまり慌てずにすんだ、と学生たちは準備の大切さも学んだようだった。

以上が、今回の国際学会に初参加した学生たちのその後の様子である。学生が参加できるような国際学会が、日本国内で開催されることはなかなか稀であるが、今後ともこのような機会を学生に提供できるよう、絶え間ない向学心をくすぐり続けるのも、教員の役割として大きいと感じた。また、学生たちにも大学在籍中に、是非、学会に参加してもらいたいと願っている。

各写真は、参加した学生からの許可のもと掲載しています。

参考文献

文部省編(1996):平成7年度我が国の文教施策(新しい大学像を求めて-進む高等教育の改革、第2部第4章・第3節医学教育等の改善・充実と医療技術者の養成). 254-255. 大蔵省印刷局.